

12. 原発事故

(時: 2011年 場所: 福島第一原子力発電所)

ところがある日、大きな地震が起こった。とんでもなく大きな揺れだったので、原子炉の運転はすぐに止められた。原子炉の運転を止める時は、ほくたちの間に金属の板を挟み、熱線ビームがお互いにぶつからないようにするんだ。

原子炉の運転が止まり、強い熱線ビームは飛んでこなくなった。でもそのあと、恐ろしいことが起こった。大きな津波が来たんだ。津波のせいで何もかもが止まってしまった。そう、あのとても大切な水を送り込んでくれるポンプも止まってしまったんだ。分裂したばかりの仲間たちは、何度も変身して熱線ビームをたくさん出す。だから水はあっという間に沸騰してなくなってしまう。水がなくなると、あとはどんどん熱くなるばかりだ。鉄やコンクリートでも溶かしてしまうくらい熱くなるのもあっという間だ。

まず、ほくを包んでいる燃料棒の筒が溶けてしまった。その時ほくはもうとても熱くなっていたので、じっとしてはいられない。ガスのようになって燃料棒の外に飛び出した。燃料棒の外とはいっても、それはまだ原子炉の中だ。ほくはしばらくそこでうろうろしていた。そうしたら、こんどは原子炉が壊れそうになってきた。原子炉が爆発したら、ほくたちの仲間がみんな外に飛び出してしまう。

これは大変だ!と思った原子炉を運転する人たちが、風船の空気を抜くようにほくたちの一部をわざと外に出して原子炉が壊れないようにした。ほくはその時、外の世界に出た。

